神さまを見たことは……たぶん一度もないと思う。
アタシは悪い子で、信心も足りなくて、情けないことに頭まで悪いもんだから、神さまはいつまでたってもアタシの前に姿を現さない。
でもまぁ、それは仕方のないことだと思う。
世の中にはアタシよりも神さまの助けを必要としている人がいて、アタシなんかを助けているヒマがあったら、他にやらなきゃいけないことが沢山あるってことなんだろう。それはいい。それは正しい。神さまはいつだって忙しいのだから、自分のことは自分でやらなきゃいけない。それが道理ってもんだ。
だから神さまが姿を見せないってことは――まだアタシにもできることがあるってこと。どんなに痛くても苦しくても……そう思えば、うん、何だか力が湧いてくる。親父がよく言っていた『試練』って言葉――これがそうなのだとしたら、何があっても受け止めてやろうって気になれるのさ。
アタシの後ろには神さまがいる。
そう信じられることほど心強いものはない。
「そっちも終わったみたいね」
背後から掛けられた声に、ゆっくりと振り向く。
綺麗に巻かれた縦ロール。花飾りをあしらったベレー帽。

コルセットによって強調された女性的なラインと、引き締まった縦縞の黒タイツ。
「そっちは随分と手間取ったみたいじゃないか」
挑発するような物言いは、アタシの悪い癖だ。
本当は全然心配していない。
コイツが苦戦するところなんて想像もできない。
いつも優雅に微笑を浮かべ、踊るように戦う――それが巴マミのスタイルなのだから。
「そうね。思っていたよりも時間が掛かってしまったわ。ごめんなさいね。手伝ってあげられなくて」
「なぁに。こっちだってラクショーだよ。思ってたより数が多かったもんで、ちょいとばかしウザかったってだけさ。アンタの手を借りるまでもないよ」
アタシの周りには無数のぬいぐるみが転がっている。
腹を裂かれ、腕をもがれ、ズタズタになったぬいぐるみたち。
その中の一際大きなテディベアに腰掛けて、アタシはにやりと笑ってやった。
本当は――ちっとばかし無理をしすぎた。
外見の治癒を最優先にしているからバレてないと思うけど、実は内臓が幾つか潰れている。
可愛らしいぬいぐるみ相手だとナメてたらとんでもない。本物の熊だってあそこまで怪力じゃないだろう。デタラメに振り回される一撃をまともに喰らっちまって、アタシの身体は壁にめ

り込むような勢いで叩きつけられた。血を吐きながらも何とか倒せたものの、正直なところまだ立つことすら覚束ないってのが現状だ。

「そう……それじゃ後は私に任せてもらおうかしら」

「お、おい」

「しばらく休んでいなさいな。後輩の前なんだし……少しは私にも格好つけさせてよね？」

極上の笑みとウインクひとつ。

それだけを残して、マミは魔女の待つ部屋へと飛び込んでいった。

「ちぇっ、お見通しかよ」

苦笑しつつ、ぬいぐるみのお腹に寝っ転がる。大きすぎるお腹は高級なベッドみたいにふかふかで、アタシの身体を柔らかく包み込んでくれた。動いている時はあんなにも憎たらしい顔をしていたのに、倒してみるとどこかマヌケで可愛らしい。うつ伏せになってお腹を両手いっぱいに抱きしめてみると、ふかふかのお腹はどこかお日さまみたいな匂いがした。

昔見たアニメにこんなシーンあったよなーと思いつつ目を閉じる。

扉の向こうから聞こえる銃声と、巨大な何かが暴れているような破砕音。

それらを子守唄にアタシはちょっとだけ眠ることにした。

マミのことだから、どうせすぐに倒してしまうに違いない。そうしたらこの空間も、ぬいぐるみも、極上のベッドも、夢のように消えてしまうのだ。